

「記憶」と「余白」ー土をめぐる風景の継承と多様なプログラムを許容する計画のフレキシビリティ

産業と学問が一体となる伊那谷の街の拠点として、統合する **3科4校の記憶**を受継ぎ発展する計画です。

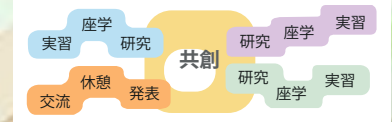
変動する専門学科教育の現状と展望から、教育関係者との柔軟な設計調整を可能とする**余白のある＝計画自由度の高い**学校を構想します。

座学・研究・実習・発表など様々な**行為（アクティビティ）**に着目し、各室の性質に合わせ、敷地内で適切な距離を持つように配置します。



NSD の理念と共鳴する 5つの設計ポイント

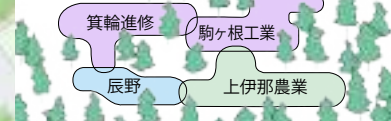
アクティビティを軸に余白を持つ



先生に寄添う柔軟な計画



記憶を受継ぐ配置



融合と共創の象徴空間

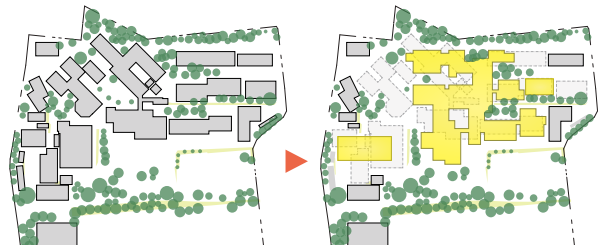


地域と育つ開かれた体制

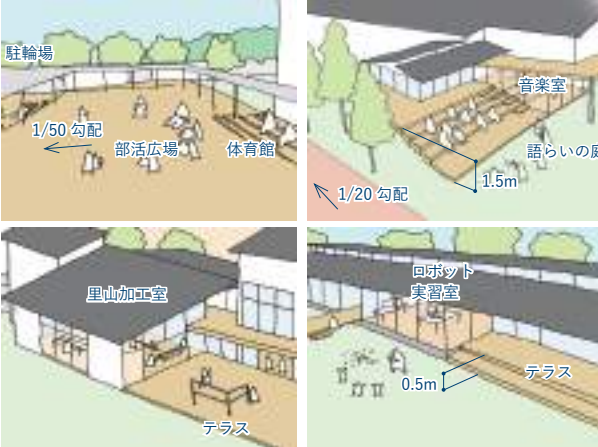


土の記憶を残す、樹木と地形を引継ぐ計画

全ての農地はもちろん、敷地に残る豊かな既存樹木や地形を最大限尊重し残します。**農業高校としての土の記憶**を受け継ぎながら、既存環境を手掛かりに新しい**総合技術校としてのアクティビティの場を埋め込んでいく**、継承と発展の配置計画です。



既存樹木の配置を引き継ぎ、歩者分離を実現しながらも生徒の通学動線と地域ゾーンが自然に交わる配置

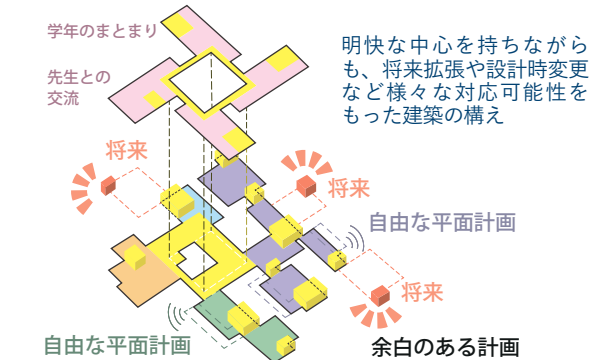


微地形に寄り添い様々な場を作る

教育のイノベーションに向けた展開可能性

明快な構成とフレキシブルな計画で、基本計画策定時にさまざまな意見を集約・調整が可能な土台となる計画を提案します。**地域の教育事情を最優先に**、総合技術新校ならではの「学びの連携プラットフォーム」のための構成です。

融合の象徴となる核＝コア・フォレストを中心に、農・商・工が**独立性を保ちながら緩やかに**相互関係する、融合と自立の両立を実現します。



コア・フォレストは同時に**学科横断的な共有スペース**です。1F は中央から周囲に伸びる**計画自由度の高い専門学科ゾーン**、学科ゾーンの中にはエリアごとに関節のように**ハブとなるFLAと専門教室**で構成されます。

2F は3学年の各ゾーン、分教室と職員エリアを**風車状に配置**。学年の帰属意識を保ちながら、先生と生徒の一体感を生み出します。**FLA同士が上下でつながり**、動線の選択性を担保します。

土の記憶・既存環境を最大限に保存する配置計画

豊かな並木道と正門、体育館と縁側、思い出の芝生広場の配置を変更せず、生徒/OBOG/地域の大人、この場所で過ごした**営みの記憶**を引き継ぎます。**4校すべて**調査とヒアリングを通じて要素を発見し計画に埋込みます。敷地の余白は**将来建替スペース**、技術の発展に応じた専門科教室の増築や改変にも対応します。

地域の大人の**多数が車で来校する実状**を考慮し、**駐車場を昇降口側**にまとめて配置。同窓会館側を車両入口として、**地域ゾーンと隣接しながら生徒動線・地域ゾーンとの歩車分離**に配慮します。校舎内は段差を作らずバリアフリーを実現します。



3科4校を融合しながら計画の自由度を確保する校舎配置

土・樹木・農地の既存環境を最大限維持すること、新設校舎と既存利用施設との動線を考慮し、グラウンドと校舎の位置関係は変更しない計画を提案します。

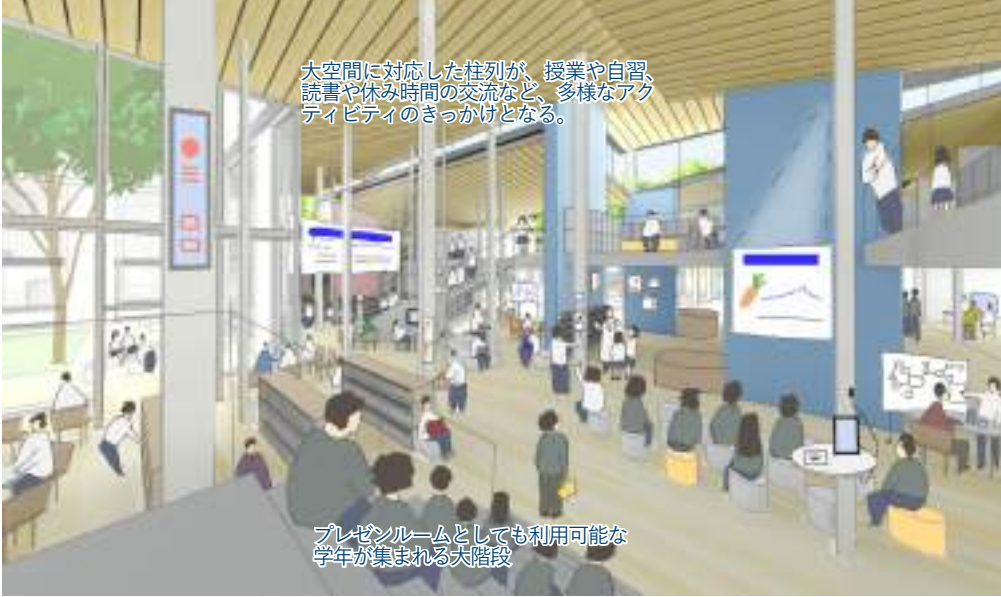
	A：南東側配置案	B：敷地中央配置案	C：北西側配置案
既存棟・敷地との関係	× 農業科の既存建物との距離が遠い	△ 一階に大きな高低差が生じ移動が難しくなる	◎ 既存の建物同士に中央に配置が可能
既存樹木の保護	× グラウンド確保のため既存樹木の大規模な伐採が必要	× グラウンド確保のため既存樹木の大規模な伐採が必要	◎ 既存樹木の位置を配慮可能
工事中の影響	◎ 仮設校舎無しで、短期間の建て替えが可能	◎ 仮設校舎無しで、短期間の建て替えが可能	◎ 仮設校舎が必要。予定施工期間内に施工可能

次に、3科4校の融合、敷地の有効活用、既存施設との関係、余白のある計画性の観点から比較し、明確な中心+有機的なフィンガープランを提案します。

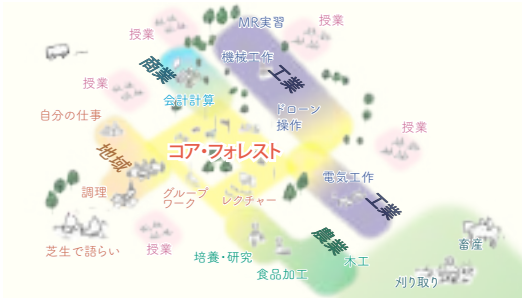
	C-1：南西・北東谷型配置案	C-2：センターコア・コンパクト案	C-3：センターコア+フィンガー案
既存棟・敷地との関係	◎ 既存棟との距離が近く、連携が容易	× 既存棟との距離が遠く、連携が希薄	◎ 既存棟との距離が近く、連携が容易
動線	× 動線が長い	◎ 動線が短い	◎ 各科のHRから、専門教室までの距離が適切
学習空間	△ 片廊下の室が多くFLAが単調	◎ 中廊下型でFLAの空間が豊か	◎ 中廊下型でFLAの空間が豊か
学科間の融合	△ 専門室と共創空間が遠く、科の独立性が高い	◎ センターコアを介して、科同士が交わりやすい	◎ センターコアを介して、科同士が交わりやすい
既存樹木の保護	× 谷の位置と既存の樹木が多い位置と重なる	◎ 既存樹木との関係性が希薄	◎ 既存樹木の位置に最も配慮したボリューム配置
工事中の影響	◎ 段階的な施工が可能	× 工期の分割が難しい	◎ 段階的な施工が可能

明快な「核（コア）」により生まれる「余白」、担保される計画のフレキシビリティ

コア・フォレストの内観イメージ



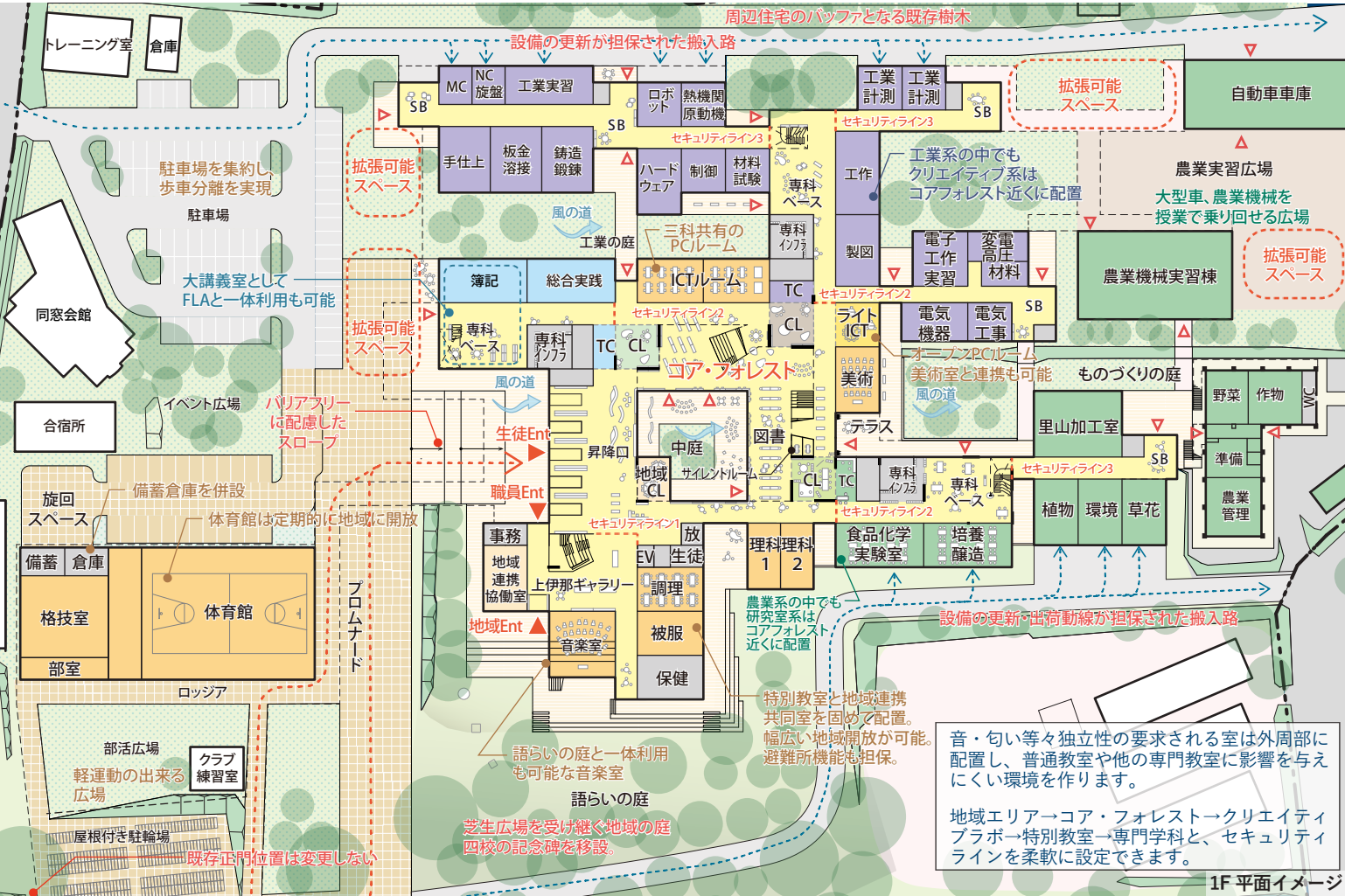
融合と共創の核であるコア・フォレストを中心に、周縁部にいくにつれて専門性の増すグラデーションなアクティビティの配置イメージ



中央にメディア機能を包含したコア・フォレストを配置し、イノベティブな協働を促進します。コアフォレストには、様々な機能を持つポスト柱の柱列「止まり木」が点在し、多様なアクティビティを誘発します。

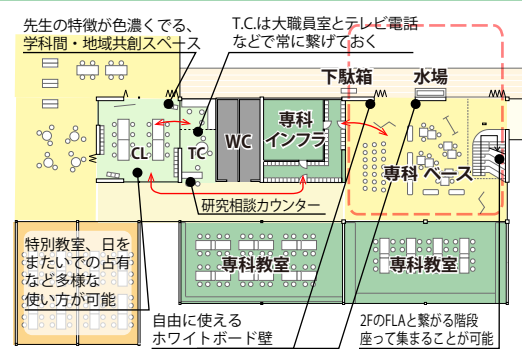


三科を融合し地域とつながる核（コア・フォレスト）と、フレキシブルな計画を許容する専門エリア



1F 平面イメージ

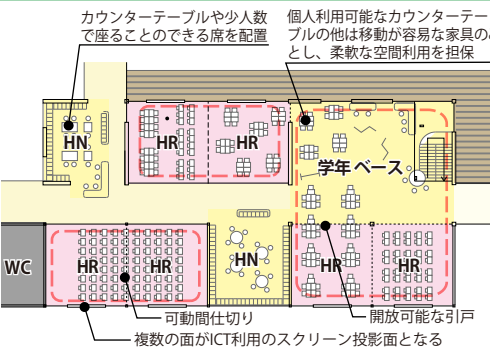
融合の共創空間、専科の探求的学び、クラスルームへの帰属意識、それぞれの場所を発見できるしくみ



1F: 専門的探求と融合のイノベーション

中央にメディア機能を包含したコア・フォレスト。そこに顔を出した各科の入口には専門教員室 (TC) にクリエイティブラボ (CL) を併設、イノベティブな協働を促進します。各専科の特徴が色濃く出る場であると同時に、複数の科同士、地域も巻き込んだ共創の拠点として授業時間単位を超えて使用されるスペースです。

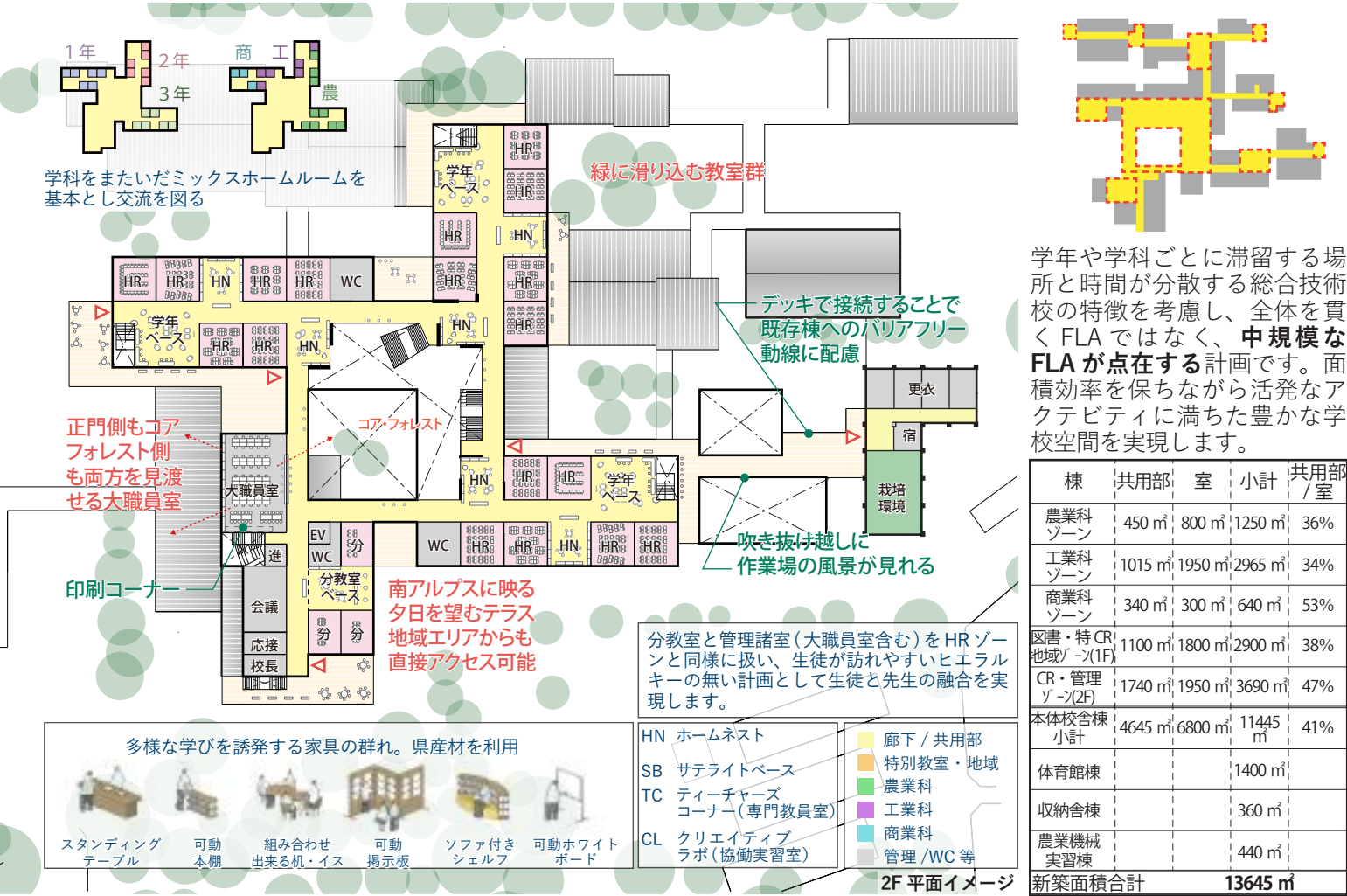
各科は専門の FLA (専科ベース) と大きな倉庫 (専科インフラ) を持ち学科内の独自で専門性の高い多様な活動を担保します。専科ベースは学年ベースと上下でつながり出会いを誘発します。



2F: 学科を超えた居場所と多様な使い方

FLA は通過動線となる通路状ではなく滞留しやすいまとまったスペースを確保します。学年一斉授業から少人数のグループワークまで、授業への展開容易性を優先します。HR の自由な使い方を促すためロッカーは教室外に配置、少人数で集まる生徒の居場所にもなります。大きな FLA (学年ベース)、少人数の集まりに適したワークラウンジ＋ロッカースペース (ホームネスト) それぞれが状況に応じて自分の場所を発見できる仕掛けです。

滞留型 FLA を持ち各学科と有機的につながる HR ゾーンと先生と生徒が融合する管理エリア



2F 平面イメージ

学年や学科ごとに滞留する場所と時間が分散する総合技術校の特徴を考慮し、全体を貫く FLA ではなく、中規模な FLA が点在する計画です。面積効率を保ちながら活発なアクティビティに満ちた豊かな学校空間を実現します。

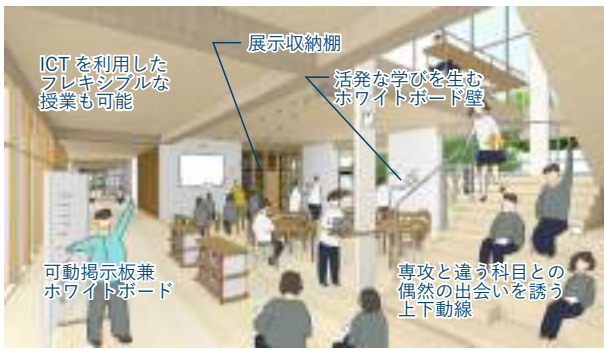
棟	共用部	室	小計	共用部 / 室
農業科ゾーン	450 m ²	800 m ²	1250 m ²	36%
工業科ゾーン	1015 m ²	1950 m ²	2965 m ²	34%
商業科ゾーン	340 m ²	300 m ²	640 m ²	53%
図書・特 CR 地域ゾ (1F)	1100 m ²	1800 m ²	2900 m ²	38%
CR・管理ゾ (2F)	1740 m ²	1950 m ²	3690 m ²	47%
本校舎棟小計	4645 m ²	6800 m ²	11445 m ²	41%
体育館棟			1400 m ²	
収納舎棟			360 m ²	
農業機械実習棟			440 m ²	
新築面積合計			13645 m ²	



地域連携協働室に隣接する上伊那ギャラリー (ウェルビーイングスペース)



クリエイティブラボのイメージ



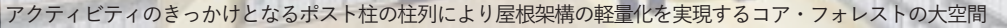
専科インフラと一体の専科ベース (専門 FLA) 周りのイメージ



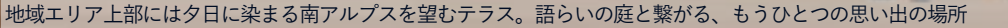
学年ベース (普通教室 FLA) 周りのイメージ



ホームネストのイメージ



計画の自由度とコスト効率を重視し、鉄骨ラーメン造を基本に計画します。CL や FLA など、アクティビティのハブとなる場所の強度を高く設計することで空間にメリハリを与えると同時に、教室部分の構造部材の最小化を実現。設計期間を通じた調整や将来計画に対応しやすい計画の自由度を高め、建築計画と構造計画が無理なく連動します。大空間のコアフォレストや FLA の止まり木（多様なアクティビティに応答する柱列）には空間を仕切るポスト柱（□ -125 × 125）を用います。屋根架構のスパンを小さくすることで鋼材料を軽減する、構造計画にも寄与する形式です。

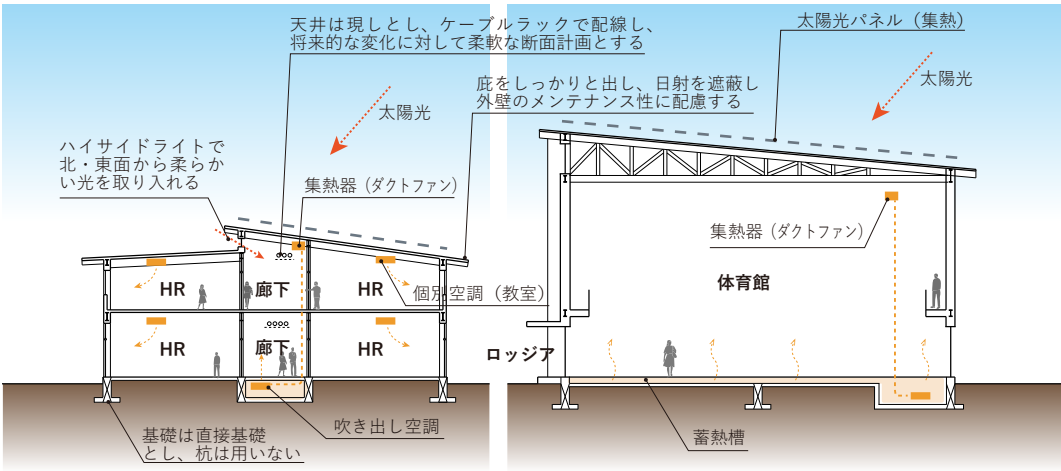


特殊な授業が多い学校の特徴と ICT 化に配慮し、蓄電池を兼ねた**ポータブル電源**の導入を提案します。屋内外で自由に電源が用意できるとともに、初期設置で過剰な設備にならず、太陽光発電で充電する災害利用も可能な電源とします。



コストコントロールは物理的な設計内容だけではなく、適切な業務進行とあらゆる部分でのコスト意識が重要です。計画（設計）視点と進捗マネジメント視点、両方の側面から常に計画全体を把握し適切な業務進行を実現することで、総合力としてのコストコントロールを実現します。

総合技術高校の特徴も活かし、授業で「郷土料理＋防災食」、「オープンキッチン」を地域と一緒に開発するなど**ハードソフト両面での拠り所を形成**します。生徒が使用するポータブル電源は非常時利用にも対応可能です。日常から使用していることにより非常時にも円滑に活用されます。日常の活動が非常時の訓練となるフェーズフリーの考え方を大事にします。地域マイスターは防災に関心を持つ生徒も想定し、**防災街歩きや避難所運営体験**など、防災 WS も行うことで、地域とともにある防災計画づくりを行います。



④ 事業実施に係るプロセスマネジメント

3科4校、統合する学校の歴史を受継ぎ未来につなげる協働のプロセス

「自己を磨き、未来をデザインできる力を育てる高校」の学校像の通り、学校づくりの段階から学校地域が自分ごととして共に作り上げるプロセスを計画します。

■統合校の記憶を未来につなげるプロセス

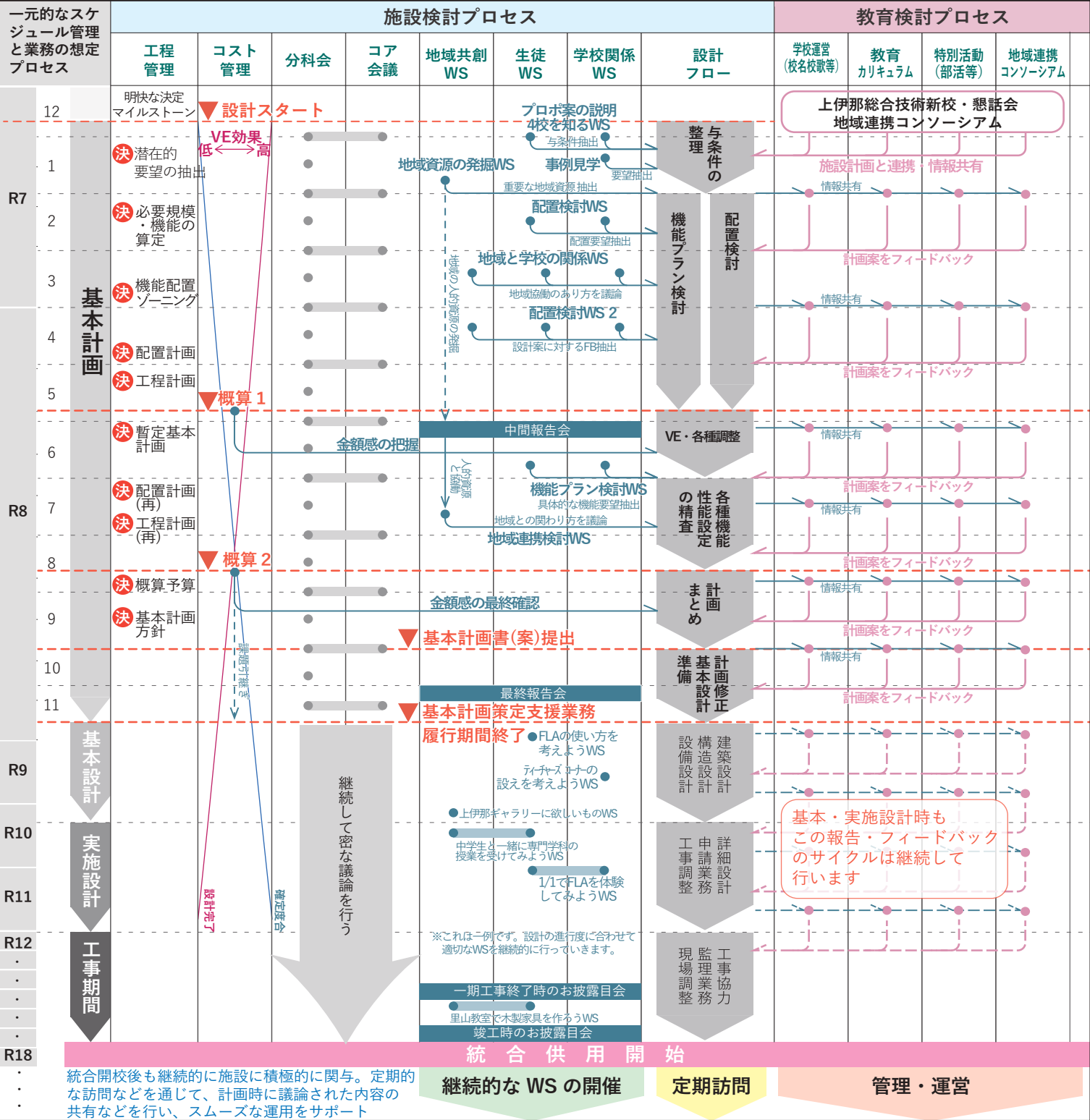
上伊那農業 / 駒ヶ根工業 / 辰野 / 箕輪進修、4校すべてから新校に引き継ぐべき歴史や記憶と、現在の課題を関係者と共有し計画に反映します。4校の同窓生から、新しい「母校」として愛着を持ってもらえる学校づくりを目指します。
上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会との連携を前提に、プロポーザル案にこだわらない柔軟な検討を行います。

■「共につくる」を実現する組織作りとWSのプロセス

基本計画段階から地域の関連機関と協議し地域連携ワーキンググループを設立。初期から設計と地域連携活動を連動させることで、施設計画と探求的学びを接続します。
ワークショップや会議は関係者ごとに実施。取り残されるものがないプロセスで、行政・学校・生徒・地域・保護者やOBOGなど皆が当事者となる「学校づくり」を目指します。

確実な業務遂行を実現する、統合開校後まで見据えた一元的な進捗管理と明確なマイルストーン設定

多くの公共施設経験を持ち、人・工程・コスト管理の責任を持つ管理技術者（統括）と、多くの学校施設の経験を持ち、学校計画の責任を持つ意匠主任の手動の元、一体的に両社の担当者が同じ場所で業務を行うことで、確実な業務遂行を実現します。基本計画時点から、統合開校後まで見据えたスケジュール表およびマイルストーン策定を行い、関係者が常に長期的視野をもって多岐にわたる情報を把握できるように努めます。また、コア会議とワークショップのみならず、工程管理、コスト管理、分科会、さらには施設検討だけではなく教育検討のプロセスまで、あらゆる要素を一元化したスケジュール表で管理し、「いつ / だれが / なにを」を意識した業務推進を行い、適切な時期に適切な決定が行えるようコントロールします。



統合開校後も継続的に施設に積極的に関与。定期的な訪問などを通じて、計画時に議論された内容の共有などを行い、スムーズな運用をサポート